新春鼎談「皇居と新美観論争」

高さ制限からデザインへ

出江　　寛　（建築家　　（社）日本建築家協会(JIA)会長）
五十嵐敬喜　（弁護士　　法政大学教授）
竹内　壽一　（建築家　　JIA広報委員会）

かつて、皇居周辺の景観について、丸の内美観論争、巨大建築論争、東京駅赤レンガ駅舎保存運動など幾つかの論争や運動がありました。いま、丸の内マンハッタン計画に基づく超高層ビル化が進み、首都東京の要であり江戸を引き継ぐ国民の共有財産・皇居周辺の景観が大きく変貌しつつあります。

本稿は2008年11月26日、皇居周辺の景観をめぐる JIA会長 出江寛氏と弁護士 五十嵐敬喜氏、JIA広報委員会 竹内壽一による「現地鼎談」を、(社)日本建築家協会(JIA)の機関誌「建築家2009年新年号（02月号）」に掲載した記事です。皇居内から超高層ビル群を眺め、皇居と丸の内を「ハレとケ」の二元対比として、ハレを「沈黙（文化）」、ケを「喧噪（文明）」と分析。東京海上火災本社ビル（前川國男設計）がひとつの基準となって、高さや素材、形態を吟味した文化的な香りのする超高層も可能ではないかなど、「文化論」が展開します。

なお、You Tubeで「皇居周辺地区で新美観論争(1)～(5)」としてUPされています。
http://jp.youtube.com:80/user/hiroya07　http://picasaweb.google.co.jp/hiroya2007/hxJlMJ#
また本稿は、フォトジャーナリスト・佐藤弘弥氏による取材・写真撮影・編集をベースに、更に推敲・編集したものであることを付記しておきます。　（広報委員会 竹内壽一記）

大手門前からパレスホテルを見る三人
（左より、出江　寛、竹内壽一、五十嵐敬喜　各氏）

1　プロローグ　問題の所在

（喫茶室にて）
五十嵐　皇居周辺に最近どんどん大きなビルが建ち、その波がとどまりません。

出江　この問題は、大変複雑に見えるが、問題を「文明論と文化論」から進めて行けば解決できるのではないですか。景観における建築の良し悪しを決めるのは形と外装です。外装を何にするかという問題が第一。それから、（皇居が）見える　見えない　の問題は、後ほど提案しますが、割と簡単に解決できると思う。21世紀になって、皇居の前にこんな大きな建物を建てるということは、皇居は言わば国家の財産ですから、やっぱり最初から「文明論と文化論」の側面から話を進めるべきだと思います。

五十嵐　皇居周辺地区の高層化に関しては、これまで2回の論争があった。神代雄一郎さんらの「巨大建築論争」と、それから前川國男さんの東京海上ビルの論争です。しかし今はこれについて誰も何も言わなくなった。今回、出江先生や竹内さんとこの問題を議論し、新たな美観論争を起こしたい。そしてこれまでと異なって、「建築家間の論争」にとどめることなく、「国民」を参加させたい。今日は、「デザイン」を中心にして、お伺いします。最近の建築ラッシュとそのデザインについてどう思いますか。

竹内　私の学生の頃でしたが、1974年に新宿に超高層ビルが建ったときに、巨大建築論争が起こり、また前川さん設計の東京海上が建ちました。それでこの辺りが話題の中心になっているんです。その後、議論がパタリと消えて、10年ほどたって今度は東京駅の赤レンガ駅舎保存運動が起きて、今回の皇居と景観問題につながった。この問題は断続的に繰り返されています。**（※年表）**

五十嵐　そうですね。もうひとつ、丹下健三さん設計の（旧）都庁舎の建築問題がありました。その時、大谷（幸夫）、黒川（紀章）、磯崎（新）さんの議論も忘れられませんね。ところがこれはそれきりになり、議論は続かなかった。しかし現在は「景観」が追い詰められていることもあるし、皇居は特にシンボリックな地域ですから、真っ当な議論をしたい。
　現在の高層ビル化の原点である高い容積率について、誰も何も言わない。少し異論があらわれたとしても、それは表面的なファザードのようなことばかり。そこには市民が議論に参加していない。そういう状況が今日の都市の崩壊を招いているような気がする。日本の建築界は本当にこれで良いのか。そこで今日は、大きな視点から、さまざまな論点を出してもらって、皇居周辺の都市計画に対する世間の無関心に一石を投じたいものです。

◇　◇　◇

　まず皇居の中に入って、皇居というものの本質に触れてみたい。その後で、それを踏まえて、もう一度皇居周辺地域にはどのような建築物が相応しいのか、という議論に発展させましょう。
　やはり見ていただくのが一番。皇居は石垣の積み方ひとつを見ても美しい。ついつい触りたくなってしまいます。ここは日本文化の奥行きを感じさせます。
（3人、大手門より皇居「東御苑」に入苑し、散策しながら議論をする）

百人番所東側の石組みの美

2　皇居　石組みの美学

（本丸入口の石垣前にて）
出江　（全体としては）キチッとしている。切石でね。それに対して、あんまり固すぎないように、字で言えば「草書」です。それを感じるものが、（石垣を指さして）この辺に残っていてね、経年変化で石の色が違ってきています。この辺は、モンドリアン（注１）の無機的な絵の構成の面白さを見せながらも情感を持っている。皇居百人番所の横にある台形の石組みを見ると、正面から見て、真ん中は割と自由にやりながら、両サイドと天端は直線的でキチッとしているでしょう。それで格調を失わない。固すぎないように、適当に真ん中の辺で遊びがある。字で言ったらこれは、「真、行、草」の「行書」と言うか「行体」に当たります。

五十嵐　まさにそうですね。下の方は斜めに切り込んでいる。このデザインは凄い。安定感と同時に変化、しかも自然の転回のようなものがみられる。息づいていると言ってもよい。

出江　構造的にも、台形だから、中側に倒れていくことによって石垣全体が安定する。だけどあの曲線とかね、全部切石にしないで、真ん中に自然石的な石を入れているでしょう。あれが固さを和らげているのです。こういう石組みのやり方というものは、日本の伝統文化というか、中々のものですよ。

五十嵐　この石組みですが、色んな種類の石を混ぜていますね。これはどういうことでしょう。

出江　もちろん混ぜてます。混ざっているからこそ面白いのです。日本文化論そのものです。

五十嵐　いろいろな石を組み合わせることによって色が変化していく。しかも古くなればなるほど味が出るというようになっている。

百人番所（右）を視察する三人

（百人番所の前に来て）

五十嵐　百人番所はどうですか。

出江　この建築は、「真行草」で言えば、楷書に当たる「真体」で出来ている。瓦に色むらがあるでしょう。あの色むらが、人間の心というか、喜怒哀楽を表している。先ほどの石垣と同じです。今の瓦は灰色で一緒でしょう。しかしここではこの瓦の色むらが面白い。これも文化です。

五十嵐　屋根を二重に掛けているんですが、これはどういう意味があるのでしょうか？

出江　屋根が切妻（きりづま）で一発で下まで行くよりも、ふたつあることで、上屋と下屋のところで影ができる。あれがいい。下屋（げや）のところは、日本では檜皮葺（ひわだぶき）にしたりするんだけど、ここはまあ、格調高くひとつでやっているのだと思います。

五十嵐　この前、韓国で李王朝の墓所と大きな庭をみてきましたが、そこでは日本の屋根よりももう少し反っていた。中国ももちろんもっと極端に反り返っている。屋根と反りはどう見たらよいのですか。

出江　「反り」というのは、中国とか韓国で多いでしょう。日本は794年に京都に遷都してから、日本的なデザインに徐々になっていった。青竜刀があるでしょう。もの凄く反っている。日本刀は、ちょっとしか反っていない。日本的な感性に変わっていっている訳です。何で青竜刀のように反ったかというと、大陸では人間の拠り所がない。真っ平らでね。日本は山があって川がある。拠り所がある。（大陸である中国では）人間の存在感を出すために、反りが必要だったのでは。力強さを出すために、反りがあったり、照りがあったり、赤・青・黄等、色が濃かったりする。日本は四季折々の緑花がいっぱいあって、そんなことしなくてもいい。その結果、百人番所のようなデザインが出てくる。

五十嵐　これと比べて、濠を隔てて百人番所の背後に見える、あっちの近代高層ビルはどうみますか？

出江　あれなんか、どうしようもない。だけど、それも仕方ないと思う。経済的発展の関係でね。あの植栽見てくださいよ。真っ直ぐに「スパッと」定規で引いたように刈り込んでいる。角刈りにね。建物だけでなく、これも「真体」の植え方です。そしてこの刈り込みの向こう側の樹が自由（自然）になっている。開放している。これも石組みと一緒で、前をキチッと刈り込んで、後ろを自由にしている。植栽もきちんとした、しかも石垣や建物と連続する哲学によって作られている。高層ビル群は経済が優先して、哲学に乏しい。

天守台から丸の内超高層ビル群を望む
中央小さな茶色のビルが東京海上ビル

3　皇居　天守台から丸の内の高層ビル群を望む

（天守台跡にて）
出江　丸の内界隈の高層ビルも、何げなく細くスーッと立っているのはいいが、あっち（右側）のように屏風みたいにベタッとしているのはいかん。空間のコミュニケーションがなく退屈である。もっと細くして、空間が抜けていれば、全然感じが違う。細いビルの方は涼しげに見える。

竹内　スカイラインが気になります。屋根のようなものがあれば、それなりにいいかもしれない。日本建築の良さの一つは、屋根だと思います。超高層ビルがみんな陸屋根になると、墓石のように見えてしまう。最上階に屋根を載せると、上昇感が出るが、屋根そのものは「もうこれ以上、上に伸ばしません」という「フィニッシュ」の意志表示でもあると思う。陸屋根は、屋上として使いたいのか、更に上に伸ばしたいのか、未完成の意志表示か、意志未確定の表示なのか、不明ですね。

五十嵐　超高層というと、日本ではほとんど直方体になっていて、変化がない。世界にはイギリスのロイズ本社のようなデザインの超高層もある。外国では色々と工夫しているのに、日本の高層ビルは、何故みな陸屋根になるんですかね。屋根以外にも、ファサードの整え方もほとんど画一的です。また、別な言い方をすると、ここに見える超高層ビル群は皇居に対してまったく尊敬がないというか、不遜な感じがする。

出江　アメリカなんかの場合は、雨があんまり降らないから、陸屋根でもいいんですよ。日本の場合は、アメリカナイズすることがモダンだと勘違いしている。だから屋根を付けることをみな止めてしまった。本来は雨の多い日本では、屋根の形をもっとリファインして、国際的に通用するものを造ればよかった。

竹内　ここから見ると、単調この上ない開口部やガラスのカーテンウォールが多いですね。「自らを露出している」のではないですか。人から見られていても平気なので、よその空間を覗き込んでしまうことに違和感をもてなくなってしまうのでしょう。
　都市景観は、建築群のファサードで決まるものかもしれませんが、本来は、道路や空地から見える「建築の立面やお化粧術」ではないんでしょうね。建築の集合体の域を超えて、場所に応じた美しい佇まいと環境を創るための「時間的・空間的な共有表現」ではないか。しかし、丸の内には人が住んでいなくて、生活に直接関わる人たちのチェック機能がありません。「皇居」という住まいと隣接する業務地域で高層建築が乱立すると、「国家の品格」に関わってしまいます。

五十嵐　北の丸にあるあれが日本武道館です。こっちから見ると、あの屋根の色はなかなかいいですね。

出江　緑青でね。

五十嵐　ここに江戸城の天守閣が聳えていました。60m弱あったのかな。姫路城より一回り以上大きな城があった。天気の良い日は、千葉の方からも見えたそうですよ。しかし燃えてしまった。この下には江戸城の大奥があったがこれもすべて消えてしまった。ロラン・バルトは皇居を見て、「空虚である」（注2）と言ったそうです。焼けたから無なんだけれど・・・・。この無というか空虚というか、「何もない」ということがまた新たな日本の文化の歴史を創っている。ところがこの周辺にマンハッタン計画（注3）というのが20年前に計画され、世界の一大金融センターを建設しようとした。200m級の高層ビルを60棟建てる計画だ。今まだ3棟しかないが、丸ビル、新丸ビルがほぼ建ってしま

って、今後も続々と建設される可能性がある。
　そして丸の内周辺全部がツイタテのように皇居の前に並ぶことになる。丸の内側だけではなく、東京駅の反対側の八重洲口周辺まで、高層ビルが並ぶ。「無」と超高層の乱立。これをどう表現したらよいのか。言葉がない。

出江　まあ、将来に向けて、いずれ新しい時代が来るわけだから、どんな都市計画をもって、この周辺地域を整備するかということを考えた方がいい。

五十嵐　（前川國男設計の東京海上ビルを指して）前川さんの東京海上ビル（**注4**）のレベルなら、こっちから見れば、まだ我慢できる。レンガ色やその質感を含めて一応許容範囲と思いますが、他はどうでしょう。あの屏風のような建物はいかがでしょうか。高さはもちろんですが、ガラスの使い方にも問題が多い。一般的にガラスが緑を吸収するからいいというようなことも言われていますが、私には「拒否」しているようにしか写らない。

竹内　日本の古い伝統的な建築は、石垣、瓦や漆喰壁にしろ、水辺にしろ、ほとんどモノクロームですよ。植物によって彩られているのでしょう。それが日本の風土の中で季節感を表し、原色でない「中間色」化させたと思います。光が当たってキラキラ反射しないし、眩しくないでしょう。モノクロームの建築素材に、地面の土と周辺の緑や紅葉で色をつけている。この丸の内のビル群でいうと東京海上の茶色というのは、土を連想させますから、違和感がないし、ほっとひと安心できる。
　石原都知事がおっしゃっていました。「知事室にはF．ベアトという写真家が愛宕山の山頂から撮った幕末の江戸の写真がある。手前に大名屋敷の白い塀、遠くには築地本願寺や芝増上寺が望まれる。浜離宮の森が茂り、江戸前の海が輝いて見える。ほとんどの建物は2階建てで、屋根はみな濃い灰色の瓦、壁は白。モノクロームの町並みが連なっているパノラマの光景は息をのむほどしっとりと美しい。長い道路、白壁と、灰色の大海。しかし、今の東京は醜悪なものにしか例えようがない。」・・・・・首都東京の要の都市景観は否応なく他の都市に影響を与えるでしょう。

4　皇居は「沈黙の聖域」

（大奥跡を過ぎ二の丸雑木林に向かいながら）
出江　皇居という場所は、「ハレの場」です。人間の疲れを「晴れ」さす場なんです。それから濠から向こうは「ケ」の場所です。
（皇居案内図を見ながら）濠は「間合い」です。ハレ（皇居）とケ（周辺地域）を分けている。「間合いの美学」と言いますね。石垣があって、水があってね。美学で言えば、「ハレ」があって「間合い」があって、「ケ」がある。「ハレの場」の一番大切な機能は「沈黙」なんです。「ケ」の場所は、喧噪。それで車が走り、人がワイワイガヤガヤやっている。看板があって、ビルがあって、全部色が違う、形が違う。こんな喧噪の世界にいたら、人間心が休まらない。マックス・ピカートが『沈黙の世界』（**注5**）という著作の中で、「人間の本質は言葉である。神の本質は沈黙である。キリストは沈黙の人である」と言っている。沈黙の本質は、人間の心を癒すのです。だから自然というのは、沈黙しているでしょう。だから人の心を癒すのです。皇居は、沈黙の場、車も何（なん）にもない。

五十嵐　間合いの頂点というか、極地に「結界」があります。皇居のなかにもそれがあるし、皇居周辺にも、芝の増上寺とか、上野の寛永寺とか、沈黙の場が配置されていた。寺は沈黙を超えて、祈らせる。人間の心を沈黙からさらに上昇させる。

沈黙の場「皇居」と喧噪の場「丸の内」を分かつのは濠と緑
（中央にパレスホテルが見える。ここに100mの高層ビルが建つ！？）

出江　京都なんかでは、110m（一町）ごとに、寺がある。寺というのは、死者の町だから、沈黙している。あそこで人間は、心を癒される。皇居周辺には、神社仏閣は、ほとんどない。公園があっても騒々しい。だから、人間は疲れる。時として、人間が皇居に来ると「ええなあ‥‥」となる。だから、我々は沈黙のある都市を創り守らねばならない。

竹内　せっかくの皇居内の道も、こんなに舗装されたりマンホールがあったりすると、「ハレの場＝沈黙」になり切れていない。明治神宮や伊勢神宮の参道に砂利が敷き詰められているのは、日常は「ケの場」にいる人間を浄化させる働きがあるように思います。樹々に囲まれた「ハレの場」で砂利を踏んで「ジャリジャリ」と音を出すことで、逆に雑音や不浄を消す。ここでは、丸の内「ケの場」のゴーッというあらゆるものを混ぜたような、耳に快いとはいえない騒音が聞こえてきます。

5 「間合い」に高い木を植えること

（夕暮れ時　再び百人番所前にて）
出江　超高層ビルにはこの「間」がない。ただ建っているだけ。間合いがないんですよ。あの辺、木がない。切れてしまっている。直接（ハレの場とケの場が）ひっついたら、九鬼周造の『「いき」の構造』**（注6）**から外れるわけです。九鬼周造は、男と女は恋愛しても合体したら野暮だと言う。和辻哲郎も、「間合いが大事」と言っている。都市の場合は、過去の文化遺産と現代の建築を両立させる場合には木を植えることが大事です。木々の間からプロポーションのいい建物が見えれば、悪い気はしない。建築家もね。九鬼周造とか、和辻哲郎とか、文学者や哲学者の本をもっと読まなあかん。文学と都市計画は関係ないと思うかもしれないが、建築家とか都市計画家はああいう文学を読まないと良い仕事はできません。

皇居上空から丸の内を見た景観イメージ
（「丸の内マンハッタン計画」より）

（和田倉噴水公園レストランにて）
五十嵐　少しこの間の事情を説明します。計画者は当初このマンハッタン計画のような町の姿を考えていたが、後にこれを訂正した。現在では皇居から徐々に100mから200mまでというような「すり鉢状」の都市計画となっています。
　そこで一番問題となっているのが、皇居に最も近いパレスホテルの建設計画です。これは100mの建物ですが、皇居が丸見えになる。そこで宮内庁からも意見が出た。これに対して、ホテル側は建築確認も間近に迫っており、ルーバーで目隠しするという対応をしたが、すればするほど醜悪なデザインになっていく。その良し悪しはともかく、東京海上火災ビルには建築家としての前川國男の執念が見られる。しかしこの建物にはそのような覇気も誇りもみられない。というようなことで、高さ論争にプラスしてデザインについても異論が出ている。本質的なことを問わないと、事態は前に進まない。

出江　パレスホテルに関しては、予測ですけど、高さについて低くするということは、不可能に近いのでは。そこで、ルーバーを付けるにしても、不透明なこのようなもので作るではなくて、ガラスのルーバーにして欲しい。ガラスというのは、文明の材料になったり、文化の素材になったりする。透明なガラスは、情報がすぐに分かる。フレッシュさが、「文明」の本質なんです。文明と言えば超高層ビルであり、飛行機であり、車であり、「速い」とか「高い」とか、そういうものです。「透明なガラス」というのは、「あそこに美人が歩いている」とか、情報がすぐに入ってくるでしょう。透明なガラス窓は文明なんです。

皇居の景観をどうすべきか？論議の深化が期待される
（二重橋方面からパレスホテルを見る）

しかし、ガラスでも教会なんかのステンドグラスもある。ステンドグラスは外が見えない。七色の光だけがスッと入って来て、十字架があって、鉛ガラスだから音を通しにくい。密度が高いからね。やっぱり教会内部は空間全体が沈黙していて、外を見せない。だから教会に立っていると、神に向かって、心が収れんしていくように感じる。ステンドグラスというものは、同じガラスでも「文化の素材」になる。早変わりをするのです。つまりガラスというものは、文明になったり、文化になったりするということです。

ボクはガラスを使って、文化的な建築や文化的な都市を創りたい。和辻哲郎は、「取り立ての野菜を、サラダ油を掛けてサッと食べるのが文明。文化というのは、取り立ての野菜を漬け物桶に入れて、石を置いて、何日間漬けて食べること」というようなことを言っている。美味しい漬け物をコクのある味というでしょう。隠し味のことです。（和辻は）「隠し味のことを文化」というように規定しているのです。

建築に翻って言うと、隠し味のある材料というものは、文化的素材になるわけです。例えば先ほど、大門の扉に銅板が貼ってありました。銅板というのは、もともと赤というか、茶色です。それが緑色に隠し味が出てくる。鉄も、出来たばっかりの時は、真っ黒けです。だけど、外に置いておくと、一週間もするとサビという隠し味が出てきて、今度は茶色になる。銅は茶色から緑になる。金属でも、ステンレスとかアルミというものは、未来永劫ピカピカで隠し味というものが出ない。そういうものは、文明の金属です。隠し味のある錫（すず）とか真ちゅうとか銅とかいうものは、みな文化の素材になる。さっきの大手門でも、木の茶黒の中に銅板を貼ってあった。あれは木も茶黒に変化していた。木も内面性を持っている素材です。銅板も内面性を持っている素材で、どっちも隠し味を持っている。みんなアルミのサッシなんか、嫌がるじゃないですか。あれは未来永劫ツルツルピカピカ

で黴菌も住めない。人間の情も受け付けない。隠し味を持たないからです。で、僕らは、よく「文化人でありたい」とか「文化国家でありたい」とか、いつも言っているわけでしょう。人間も文化人というのは、内面性、精神性、心を持っている人のことです。それに対して、お金の話ばっかり言う人は、文明人というんですかね。

材料も、文明の材料と文化の素材に分けてみると、皇居内は、全部文化の素材で出来ていた。文明の材料なんて、ほとんど見当たらなかった。丸の内側のビルディングなどは、みな文明の材料です。ステンレスと透明なガラス、アルミのようなもの。そういう中に、前川さんの東京海上だけが、煉瓦タイルという材料で、割と影のある建築を造っているところに、文化的香りがする。しかし、例の論争で建物の上階がちょん切られてしまった。完結していないから（注7）、点数で言えば60点から70点位でしょうか。あれで最後まで出来ていたら、きっと素晴らしいものになっていただろうと思う。それが残念です。

五十嵐　文化と文明の違いは、デザインだけでなく、素材にもあらわれるということがよくわかります。イギリスのチャールズ皇太子（注8）も、私の先生であるクリストファー・アレグザンダー（注9）も、素材は「地のもの」というのが原則です。そこで疑問をひとつ。単純に文化の素材と高い建物は両立しうるんですか。構造などを含めて、一定規模以上になると文明的素材を使わないと成立できないということはないのでしょうか。

出江　高くても、文化的な素材で造ると、それなりに味が出てくるんです。

五十嵐　パリのエッフェル塔とか、ニューヨークのエンパイアステートビルなどのようにですか？　あれらなどは、鉄という素材の中で文明社会の中に文化が溶け込んでいると評価するのでしょうか？

出江　あのふたつは、高いだけではなく、デザインにも装飾があるでしょう。装飾があるということは、影がいっぱいある。影が文化であり、ツルツルピカピカが文明です。日本の超高層は透明でツルツルピカピカで、文明的な建物ということになる。口で「文化、文化」と言っても、やっていることは文明なんです。

6　パレスホテル「出江寛設計案」

出江　文化の香りのする建築をするんであれば、隠し味のあるものでなければならない。文化とはね、「古美」の出るもの、古くなるほど美しくなるものです。文明というのは、新しいときが良くて、「古美」ないわけです。

五十嵐　角度を変えて、ヒューマン・スケールという視点から言うと、今建っている建物は、ほとんど機械で造ったという感じですね。前川さんの東京海上のビルなどを見ていると、少し安心するのは、手で造ったという感じがする。この違いもありますね。

出江　いわゆるアール・ヌーボーからアール・デコに変わっていって現代の建築があるんだけれども、アール・ヌーボーは手作りの時代。アール・デコは、手作りと機械を混ぜたもの。それからみんな機械で造るようになってしまった。段々手の暖か味がなくなって、ドライになってきている。それからガラスというのは、わが国では、心敬僧都（しんけいそうず）という偉い坊さんが居て、「氷ばかり艶（えん）になるはなし」と言って、氷ほど色っぽいモノはないと、『ささめごと』（室町中期の歌論書）の中で言っている。

　氷は0度以下のガラス、ガラスは常温の氷になる。これを言い換えると「ガラスばかり艶なるはなし」とも言える。まあこれは出江流ですけどね。そうすると、ガラスをどう色っぽくするかということになる。心敬の「氷ばかり艶なるはなし」の色気というものは、人間のレベルの色気ではなく、神さまのレベルの色気で、次元の高いものです。ガラスをどのように上手にデザインできるかで、建築家の巧いか下手かが分かる。ボクはパレスホテルの建築にステンドグラスのルーバーを使いたい。ガラスだと光を通すから、室内は明るい。アルミのルーバーなんかだと、光を通さない。ステンドグラスの光を通すことによって、新しいものができる。

五十嵐　ガラスのルーバーなんて見たことないんですが、どこかにありますか？

出江　まだ、そういうものはありません。

五十嵐　隈研吾さんでしたか？　これまでさまざまな建築でルーバーを使ってきましたが。

竹内　隈研吾さんは主に木材でやっています。栃木県の馬頭広重美術館は屋根・壁ともに木のルーバーを使った美しいデザインです。最近では、竹や石などでも挑戦しているようですね。ルーバーは、風や光を通すとともに、目隠しでもある。また、壁ほど強くない境界をつくり控え目な表現となる。御簾などに見られる日本的な繊細さで自然な建築を目指しているのでしょうか。

出江　問題はね、文明にしたいのか、文化にしたいのか、やと思う。「文化国家」なんていつも言っているんやから。この設計者は、今こそ、日本にあるいは世界に先駆けて、「文化的なガラス」を使ったというんやったら、社会的な格が上がる。ホテルというのは、ある意味色っぽくなかったら、いかんもんです。ステンドガラス、あるいは他のガラスででも、ルーバーにして、文化的な建築物にしたらいい。しかもガラスというものは、現代建築を象徴する素材だから。

五十嵐　どんどん面白くなってきた。そこで論をさらに前に進めましょう。それでは先ほど見た江戸城の石組み、緑、そしてもちろん濠、さらには漆喰の白い建物などとガラスルーバーのデザインは両立させることができるのでしょうか？

出江　それはできます。ルーバーの後ろには背景がある。ガラスのルーバーが直線的で「真体」だとして、それに対して、後ろの背景は二元対比で、情緒的な材料を使うことによって実現する。例えば「耐候性鋼板」（注 10）という素材があります。大手門の木に銅板が貼られていたでしょう。みんな金属はドライだと思っている。ところが金属はウエットなものとドライなものに分けられる。金属も文明の金属と文化の金属のふたつがある。大手門の佇まいを見れば一目瞭然だ。あんな具合に、例えば壁に貼ってあれば古びていって、古くなるほど、美しさを出す。
　京都の二条城の太刀に打ち金物（鋲金物）が打ってある。紅い門が茶黒になっているところに鉄の大きな鋲が打ってある。木と鋲が溶け込んでいる。それから数寄屋建築の中で、ぶんぶく茶釜の茶釜があったり、鉄瓶があっても木造建築と紙と襖の中で鉄が調和している。銅とか錫（すず）とか、真ちゅうとか、こういうものは文化の金属。ウエットな金属です。物理的にはドライなんだけれども、古びると情感が出る。

五十嵐　例えば、ガラスで「古美」ていく建物はつくれるのでしょうか？　もちろん私たちはそのようなものとして、例えば教会とステンドグラスといったようなものは識っているのですが、「超高層」というと想像が追いつかない。

出江　それは作れます。

五十嵐　では具体的に、先生だったらどうしますか？

出江　（パレスホテルの図面を見て皇居方向に突き出しているルーバーを指さしながら）このルーバーの方向はいいんではないですか。（メモを取り出してホテルをスケッチしながら）まあ、このように皇居に対している面にルーバーを付けていけば、片一方を壁にして、皇居が見えんようになる。もし壁にして鬱陶しかったら、見えないガラスにすればいい。ステンドグラス風にね。そうすると、こちらから見れば明るくていい。

五十嵐　ファサードはどうしますか。

出江　（ホテル壁面のラフスケッチを描いて）この辺りに人が立って皇居を見た場合でも、この辺りにルーバーを配置すれば見えんでしょう。このルーバーにもステンドグラスのような材料を使えば、正面も随分色っぽくなる。現代的で情緒的という文化的なホテルが建ちます。

五十嵐　先生、少し大げさになってきますが、これを出江寛の提案ということで、世に出していいですか？

出江　それは結構ですよ。

五十嵐　こういう具体的な対案が出てくると、市民としても大いにこのようなデザインの世界に参加できるようになる。それによって国民の文化程度が高まる。フランスではかつて、ルーブル美術館の前にポンピドーセンターが建てられる時、イギリスではチャールズ皇太子が超高層ビル群に異議申し立てをした時、国民も大いに沸いた。そのようにして都市の歴史がひとつひとつ積み重ねられていくというのが望ましい。

7　エピローグ　皇居に相応しい空間デザインを

五十嵐　さて、冒頭にみた建築界の超高層論争には抽象的な超高層の是非という議論はあっても、「どこに」という場所の指摘がほとんどない。少なくとも、重要な視点としては語られていない。皇居というところは、この「場所性」、あるいはこの場所に宿る大きな物語を含めた「精神性」が際立っているところである。その断片が緑と石垣と白い壁等にあらわれている。そこでは、本来的な建築のあり方というものが問われる。今出江先生が語ったのは、今計画されている建物を前提としたいわば苦肉の策です。出江先生、本来はどんなデザインがいいと思いますか？

竹内　建築は動かないものだから、その場に似合うものが一番いい。やはり「場所性」というのでしょう。場所に相応しいデザインテーマもありそうです。どこにどういう建築が建つか。この辺りですと、皇居のお濠とか石垣、緑とか、そういうものが非常に重要な要素になる。先生の設計された近江八幡の「かわらミュージアム」のように、水辺に建つ観点からいうと、場所性は景観を決定づける重要な要件ではないかと思います。その辺、出江先生いかがですか？

出江　ボクは東京という場所は、皇居があって、放射状に伸びる世界でも珍しい偶然に出来た都市計画がうまくいっている都市だと思う。皇居があるために、こんなにうまいこと都市計画なしにいった都市はない。皇居のお蔭です。せっかくうまくいっているのに、今の日本人は、沈黙を追い出

し過ぎた。喧噪のど真ん中に沈黙のでっかい固まりがあることは素晴らしい。その中に御所がある。これからの都市計画というものは、沈黙する空間を大事にして、沈黙を追い出さないようにして、もう少し沈黙する場を遺していくような都市計画にする。論争も、「公園」というような単純な言い方やなしに、哲学的なものの考え方を都市計画の中に入れないと。経済合理性ばっかり追求していてはダメです。材料もね、やっぱり、素材で古びていって社会共通資本になるモノがいい。

緑についてですが、その大手門の前からパレスホテルを眺めても、木が圧倒的に少ない。「間合いの美」という言い方があります。この周辺には、ちゃちな木を植えず、背の高いメタセコイヤのような五階建ての高さで20mから30mくらいになる木がある。そのぐらいの高い木が生えていったら、皇居との間合いが取れる。濠があって、皇居の回りに植えるようにすべきです。ある意味、喧噪の場であるこっちはしょうがない。皇居という文化の固まりのような場所を、濠と木によって間合いを置いて、外側には文化的に好きなように建てなさいと言うしかない。

五十嵐　先生、それだけはダメです。ここまで先生の話しは説得力がありましたが、外側でも好きなように建てたらいかんです。現に、東京駅近くでは、中央郵便局の200m超高層の建て替え計画が出ていますし、さらに外延に行けば、歌舞伎座の建て替え計画も進んでいる。これらの建物はパレスホテルと同じように、すべて「文明」の建物であり、これが皇居だけでなく、日本の都市を破壊する大きな要因になっている。従って、「文化」をいかに周辺に押し広げていくかということも、出江理論の中核とならなければならない。

出江　形は色々出てくるだろうけれども、この皇居周辺の地域については、優れた建築家がデザインをするとか。あるいは第三セクターがチェックして計画し、優れたデザイナーが何人か居て、その人たちの許可がなければ、施工できないとかね。

五十嵐　先生の話は理想ですけど、これが現代のシステムでは全否定されている。都市計画の伊藤滋さんが丸の内に入ってきて、「今の日本の建築家には任せられない。むしろ都市計画的に狭義の街づくりをした方がいい」と言って、ゼネコンと伊藤滋と東京都がまず容積率を定めて、三菱地所が設計するというルールができている。この皇居周辺の計画には建築家は存在しない。できないのです。そしてこのような傾向は、ここだけでなく全都市に及んでいる。そもそも出江先生が建築家協会の会長に選出されたのは、この傾向に対する最後の橋頭堡として期待されたからです。

出江　でも、時代は大きく変わってね。ついこないだ三週間ほど前に、ボクは国交省から景観賞の委員かなんかになれと言われている。ボクは皇居のような美観地域というものは、お役所やなしにホントに美学の分かる人を集めてやるべきやと思う。

五十嵐　それでは例えば建築家協会で引き受けろと言われれば、引き受けますか？

出江　それは引き受けられますよ。やりますよ。そういう美学の分かるツワモノを集めたらいいんですよ。理論だって、材料だって、文明の材料と文化の素材があったでしょう。金属がウエットかドライか、なんて今の建築家はやってない。それから新建築見ても、建築家は「ボクは文化的な・・・・」なんて書いているけど、見たら、新建材でやっているわけですよ。嘘っぱちでね。そんなもの文化にならない。

五十嵐　美学というか哲学の部分がこれまでの論争にはなかったというのは分かります。「ハレとケ」や先生の「沈黙の場所・喧噪の場所」という概念を導入し、そこを「間合い」をキッチリ取って分

けることで、周辺の景観が文化的な建築物によって日本の伝統文化を継承し、さらに高めていく空間になる。文化的雰囲気のする美観地域にするためには、高さばかりではなく材料やデザインそのものを吟味しなければならない。

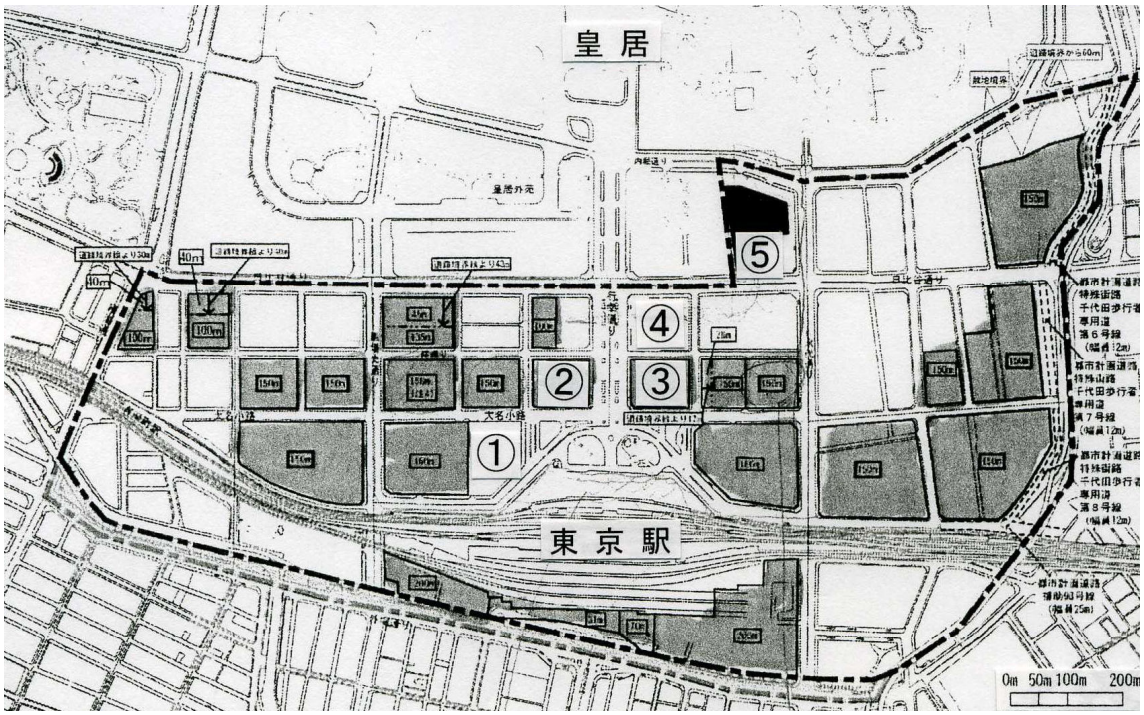
竹内　それと･･･出江先生のおっしゃる文明というか、高度な技術文明によって、限りなく文化的なものもつくれるはずです。例えば、耐火性や防腐性などはクリアして、文化的な香りのする「木造の超高層」だって可能でしょう。日本には法隆寺をはじめ五重の塔もあるし、古代の出雲大社は高さ50mほどの巨大建築だったと言われています。私は、実現可能な究極の「建築像」や「夢」をもっと積極的に語るべきだと思います。できることならそれに投資してほしい。そしてその成果をこの場所で実現し、日本独自の建築文化を世界に示すべきでしょう。

　しかし、現実的に、住民不在の場所で自由な経済活動の結果としてどんどん建築が建てられる。私たちも含めて、建築家の表現は自由でありたいが、無制限ではない。「是非やりたいこと」、「やってほしいこと」、「やって良いこと」、「やってはいけないもの」がある。その不文律のルールを守れそうにないなら、最終的には「建築確認制度」から、その場所の市民と公権力の判断に委ねる「建築許可制度」にしないことには、抜本的な歯止めがかからないのでしょうね。

五十嵐　皇居の前のパレスホテルが建て替えられるという「事件」は、今後のことも含め、非常に重要なテーマをつくってくれた。それは歴史的にも日本の文明を分けるような大きなテーマだ。そこでひとつのアイデアとして、先生たちのような建築家の議論の他に、都市計画家が加わったり、経済や宗教関係の人たちを含めて議論を深めていきたい。どうですか。

出江　いいですね。

竹内　面白い。やりましょう。JIAは建築家職能の深化と社会への浸透を目指してはいますが、他分野の専門家や一般市民の人たちを巻き込んで、社会的な運動に昇華してこそ、市民の声を反映し市民に支持されたJIA＝「専業建築家の職能団体」になると思います。「世のため、人のため、ひいては自分のため」です。



①中央郵便局　②丸ビル　③新丸ビル　④東京海上ビル　⑤パレスホテル

丸の内地区概要

※年表　皇居周辺の主な論争・運動

1966～70年	①丸の内美観論争＝東京海上火災本社ビル建替計画
1974～76年	②巨大建築論争＝東京海上ビルや新宿超高層ビルの竣工
1985年	③(旧)東京都庁舎建替論争
1977年・1987年	④東京駅赤レンガ駅舎保存運動
1988年	⑤丸の内再開発計画(丸の内マンハッタン計画)
1997年	⑥丸ビル保存運動
2008年	⑦東京中央郵便局を重要文化財にする会、パレスホテルの超高層ビル化計画

①丸の内美観論争

丸の内のビル群は高さ31m(100尺)のスカイラインと様式建築で統一されていたが、容積率導入の建築基準法改正で、東京海上火災本社ビル計画案(地上30階／高さ127m)により、「美の表現の自由」VS「ボリューム論、高さ論」など丸の内地区美観論争に発展。超高層建築推進派は、「都市形成のダイナミズムこそ時代の要請、美の表現と建築表現の自由」を主張。反対派は、美観地区条例制定への動き、都市景観論、ボリューム論、高さ論などで応酬。地価の安定化、皇居への眺望阻止等、政治的な意図も働いた。この頃より建替後 H≦100mは暗黙の了解事項となる。

②巨大建築論争

神代雄一郎は「巨大建築に抗議する」(新建築7409号)で、「巨大建築は近づき眺めていても対話が生まれない。とても好感がもてない」。前川の東京海上ビルに賛意を送り「建築の外皮の構成材料の扱いに起因するのでは」との主張に対し、林 昌二は「その社会が建築を創る」(新建築7504号)で、社会的責任を負う者として真摯な態度表明を行った。前川をたたえる宮内嘉久は「巨大建築論争の我流総括」(新建築7610号)で、神代に賛意を示し総括した。

＜注＞

（注1）ピエト・モンドリアン
（1872-1944）オランダの画家。キュビスムの影響を受け、パリで活躍。後に抽象芸術に移行。「新造型主義」を宣言。代表作『ブロードウェイ・ブギウギ』（1943　ニューヨーク近代美術館蔵）

（注2）ロラン・バルトは皇居に立って「空虚である」と。
フランスの評論家ロラン・バルト（1915-1980）が1970年に発表した『表徴の帝国』の中の言葉。日本訳は新潮社（1974 年）刊。「東京は・・・・中心をもっている。だが、その中心は空虚である」。

（注3）丸の内マンハッタン計画
1988年、三菱地所が発表した計画。丸の内周辺に200m級の超高層ビルを200棟建設し、周辺地域を国際金融センターにしようとする計画。この時も美観論争が起こり、都の反対などで立ち消えとなる。

（注4）東京海上火災本社ビル
建築家　前川國男（1905-1986）設計の高層ビル（1966 年発表-1974 年竣工）。当初の計画では、30 階建て（高さ 128m）のツインタワーの予定だったが、美観論争が起こり、10 年の論議の結果、実際には 25 階建て（99. 7m）のビルとして完成。よく見るとビルのスカイラインは、凸凹のままに残されていて、設計者の思いを伝えている（？！）。前川を称し、長年親交のあったジャーナリスト宮内嘉久はその著「前川國男―賊軍の将」（晶文社　2005 年 9 月刊）の中で、「賊軍の将」と呼んだ。

（注5）マックス・ピカート「沈黙の世界」
マックス・ピカート『沈黙の世界』（みすず書房　1964 年 2 月刊）。ピカートはドイツ出身の批評家、哲学者。この著書の中でピカートは、「沈黙」と「言葉」を対比し、神と人間の本質を明らかにした。この中で人間は、神の本質である「沈黙」を喪失し喧噪としての言葉のみにては存在しえないことを説く。「沈黙は言葉なくしても存在しえる。しかし、沈黙なくしては、言葉は存在し得ない」（同書　23 頁）。

（注6）九鬼周造　『「いき」の構造』
九鬼周造（1888-1941）が、雑誌「思想」（岩波書店）にて、1930 年（昭和 5 年）1月より2月号で発表した論文(『「いき」の構造』（岩波文庫　1979（昭和 54）年 9 月刊）。九鬼は「いき」について、「自己と異性との間に可能的関係を構成する二元的態度」とし、「二元的可能性を基礎とする緊張・・・・異性が完全なる合同を遂（と）げて緊張性を失う場合には媚態はおのずから消滅する」と言い、「いき」を「垢抜して（諦）、張のある（意気地）、色っぽさ（媚態）」と定義する。

（注7）東京海上ビルは完結していない。
注4を参照。未完としての東京海上ビルのこと。

（注8）チャールズ皇太子
（1948-　）英国の伝統的歴史的建造物や都市・田園景観が次々と壊されていくのを見て、英国が滅びてしまうとの危機感から『英国の未来像－建築に関する考察』を著し、美を取り戻すための10原則をまとめた。①場所－風景を蹂躙するな／②建築の格づけ－建築の基本原則を大切に／③尺度－小さいものほどよい／④調和－他と響き合おう／⑤囲い地－その場所をかけがえのないものに／⑥材料－それがあるべき所にあらしめよ／⑦装飾－細部を豊かに／⑧芸術－置かれる場所を考えて／⑨看板と照明－粗悪な看板を立てるな／⑩コミュニティー住む人の意見を聞け。R. ロジャースのロイズ保険会社本社ビルが建った1986年頃、前衛的な建築家からは「美の強制」と反発されたが、「我々は美なしに生きることができない」と反論した。

（注9）クリストファー・アレグザンダー
（1936-　）建築・都市計画の理論として「パタン・ランゲージ」を提唱。関係する全員が建築や町づくりに参加し、生き生きとしたものにするには、それ自体に生命をもった共通の言語を要すると考える。その中心的な価値・美は、客観的かつ根源的に存在するが定義できず、「名付けえぬ質」とした。日本ではその理論をもとに、盈進学園東野高校（埼玉県入間市、1984 年）を建設。このときの日本側弁護士が五十嵐敬喜。後に五十嵐は、『英国の未来像』と『パタン・ランゲージー環境設計の手引』（鹿島出版会 1984 年）をヒントに、神奈川県真鶴町の「美の条例」（1995 年度日本都市計画学会賞受賞）を制定した。

（注 10）「耐候性鋼板」
耐候性鋼材は，P(リン)，Cu(銅)，Cr(クロム)などの合金元素を適量添加し，緻密な表面酸化膜を生成させ塗装しないまま使用できる鋼材のこと。塗装した場合には、塗装の寿命延長が図れる。塗装費用が削減できることから、経済的な効果もある。技術的には表面に錆層が形成され、錆層が安定化することによる。（参考：日本鋼構造協会技術委員会防錆防蝕小委員会編『鋼構造物と耐候性鋼』）